

日本文語文法課本

431
93.5.10



日本文語文法課本

東亞高等豫備學校

H364-42

DEY

28343

日本文語文法課本目次

第一編 品詞概説

九品詞

附説一、體言用言助辭

同 二、接頭語接尾語

同 三、語尾の活用

第二編 文章概説

文又文章

主語説明語

動詞形容詞の性質に因る文章の構造

客語補足語

修飾語

形容詞性・副詞性	一一
主部・客部・補足部・説明部	一三
成分の位次	一三
文法的轉換的	一四
文章構成の單複	一五
單文・複文・聯文又重文	一五
第三編 品詞詳説	一七
動詞	一七
正格活用五種 四段・上二段・下二段・上一段・下一段	一九
變格活用四種 カ行變格・サ行變格・ナ行變格・ラ行變格	三一
文語動詞と口語動詞との比較	三八
動詞語尾の音便	三九
動詞活用の種類を識別する便法	四一
動詞の法	四三

終止法・連體法・連用法・命令法・名詞法・中止法・前提法……………四三

形容詞・附形容動詞……………四八

ク活用・シク活用……………四九

カリ活用・ナリ活用・タリ活用……………五三

助動詞……………六二

使役助動詞　す　さす　しむ……………六四

被役助動詞　る　らる……………六七

可能助動詞　る　らる……………七一

附　自發的……………七二

崇敬助動詞　る　らる　す　さす　しむ……………七三

附　書簡文・慣用敬語・崇敬補助動詞……………七六

指定助動詞　なり　たり……………七七

否定助動詞　ず　ざり……………七九

推量助動詞　む　べし　らむ　けむ　らし　めり　まし……………八二

推量否定助動詞	まし	じ	九〇	
希望助動詞	たし	まほし	九二	
比況助動詞	ごとし		九四	
咏嘆助動詞	なり		九五	
時 (現在・過去・未來・不定時)			九六	
過去助動詞	き	けり	九八	
未來助動詞	む	べし	一〇一	
完了助動詞	つ	ぬ	たり	一〇二
進行法			一〇五	
助詞又てにをは			一〇八	
第一類 名詞と代名詞とにばかり添ふ者			一一〇	
イ、	が	の	一一〇	
ロ、	が	つ	一一一	
ハ、	を		一一二	

ニ、にへよりからまでと……………一三

第二類 諸種の語に添ふ者……………一九

イ、は(ば)も……………一九

ロ、ぞなむこそし……………二〇

ハ、やか……………二四

ニ、だにすらさへ……………二六

ホ、のみばかり……………二七

第三類 動詞・形容詞及び助動詞にばかり添ふ者……………二八

イ、ばともども……………二八

ロ、にをがも……………二九

ハ、て(てはてもにてとて)でつつ……………三〇

第四類 禁止の意を表す者……………三四

な……………三四

第五類 感嘆の情を添へる者……………一三五

イ、なもやよはかかなかも……………一三五

ロ、がかもがな……………一三六

ハ、なむばや……………一三六

ニ、かし……………一三七

日本文語文法課本

第一編 品詞概説

名詞 名詞 副詞代名詞助詞 名詞 助動詞 助動詞 助詞 形容詞
 世界各國殆ど我が友邦ならざるはなし。

助詞 副詞 形容詞
 てすべて安全なり。

接續詞 動詞 名詞助詞 名詞 助詞 動詞
 されば、到る處に保護を受け

單語・品詞

九品詞

此の文は二十箇の單語から出來て居る。此等の單語を類別したものを品詞と謂ふ。名詞・代名詞・副詞・動詞・助動詞などいふのが即ちそれである。

九品詞 日本語には九種の品詞がある。これを九品詞と謂ふ。左に其の大要を掲げよう。

名詞 事物の名稱を表すもの。

富士山。揚子江。ニュートン。山。河。人。精神。國交。

代名詞 人事物・方向等の名稱に代へて用ひるもの。

我。汝。彼。誰。此處。彼處。此方。其方。何方。

動詞 事物の動作・存在等を表すもので、自動詞・他動詞の別がある。

〔自動詞〕 事物を處置する意の無いもの。

鳥飛ぶ。 水流る。 鳥樹梢に在り。

〔他動詞〕 事物を處置する意の有るもの。

盜賊馬を盗む。 孔明孟獲を擒ふ。

形容詞 事物の形狀・性質等を表して、名詞・代名詞等の意味を限定するもの。

高き山。 山高し。 美なる花。 花美なり。

助動詞 重に動詞の下に添うて、其の意義のまだ盡きない所を補ふもの。

船走らず。 花咲きたり。 敵すべからず。

助詞 又、テ・ニ・ヲ・ハといふ。これに、語と語との關係を表す者がある。語句

の末に添うて、種々の意を表すものがある。感嘆の情を添へるものがある。

一日の計は晨にあり。

人を笑ふな。 汝は學生なるか。

あゝ悲しいかな。 あら面白や。

副詞 重に動詞・形容詞の上に在つて、其の動詞・形容詞の意義を限定するもの。

の。 副詞が更に他の副詞の意を限定することもある。

人智稍開く。 力最も強し。 馬甚だ速に走る。

接續詞 語句又は文章等を接續するに用ひるもの。

日曜及び祝日・祭日は休業す。

善き言を聞き又善き事を見習ふ。

雨は霽れたり。 されど、風なほ強し。

感歎詞 喜怒・哀・樂等の爲に發する嘆聲で、大概は語句の上に在る。

あゝ悲しいかな。 あら可笑しや。

附説一 體言・用言・助辭

名詞と代名詞とはこれを體言と謂ひ、動詞と形容詞とはこれを用言と謂ひ、助動詞と助詞とはこれを助辭と謂ふ。

體言・用言・助辭

接頭語

正月
正月

二
や

5 4
12
149P3
13 13

2 1
文子
A 1

一 月
廿二日

接尾語

神月

走等

日すゆら
（巻文）

4425

[illegible]

九品詞の中で、動詞と形容詞と助動詞とはいづれも其の語尾を變化するもので、其の變化を名づけて活用といふ。

(語根)

(語尾)

(用例一斑)

〔動詞〕

行^ゆ

け く さ か

行か^ず 行きた^り

行^く 行^け 行^き 行^か

行^け 行^き 行^か 行^ず

〔形容詞〕

善^よ

け れ き し く

善^く 善^し 善^き 善^け

善^く 善^し 善^き 善^け

〔助動詞〕

た

れ る り ら

讀^み 讀^み 讀^み 讀^み

讀^み 讀^み 讀^み 讀^み

練習

左の諸文について九品詞の區別を試みよ。

- 一、口に蜜を造るものは、心かならず針あり。
- 二、蛙・蟬・蜂など、皆それぞれに樂を奏す。
- 三、扇を使へば風起り、鞭を振へば音を發す。
- 四、日光に浴すること少き人は、色青ざめて元氣なし。
- 五、天氣に相談せず、毎日運動する者は、醫者にも相談する必要なきなり。
- 六、樵夫は山に住み、漁夫は海に浮ぶ。人各、其の業を樂むべし。
- 七、嬉しき時にも故郷を思ひ、悲しき時にも亦故郷を思ふ。
- 八、惡しき友に交れば、日々惡しき言を聞き、又惡しき事を見習ひて損あるものなり。

第二編 文章概説

○文又文章

文章

主語・説明語

文章 單語を結合して、一個の完全な思想を表した者を**文又文章**と謂ふ。
完全な思想といふのは、或る**主題**に關して或る**叙述**をした者である。

主語説明語 文章の主題となる重なる語を**主語**といひ、**叙述**となる重なる語を**説明語**といふ。

馬	海	風	事理
走る。	甚だ深し。	稍々静なり。	判然たり。
} 主題		} 叙述	
		} 説明語	

文章は最簡單な者でも、必ず**主語**と**説明語**とがある。**主語**は、大概、名詞・代

名詞で出来て、文章の首位に在り、説明語は、大概、動詞・形容詞から出来て、文章の末位に在る。

孔明は臥龍なり。

百鳥の聲、皆音樂なり。

彼は益友たり。

周君は我等の代表者たり。

名詞も、右の如く説明語となることがある。そして必ず助動詞のなり或はたりを帶びる。

○動詞・形容詞の性質に因る、文章の構造

動詞の性 動詞の性には自動と他動との區別がある、これに因つて文章の構造にもそれぞれ異同がある。

客語 他動詞は他の事物を處置する意味があるもので、其の處置せられる事物を表した語を他動詞の目的或は客語と謂ふ。それ故他動詞を説明語

客語

動詞の性
自動
他動

孔明は臥龍なり
百鳥の聲、皆音樂なり
彼は益友なり
周君は我等の代表者なり

43/96

~~43135~~

補足語

動詞が説明語となる文例

れふし
猫
猫
猫

とする文章には、必ず客語が無くてはならない。

補足語 主語があり、説明語客語等があつても、未だ文意の完全でない場合がある。其の不完全な點を補ふ爲に無くてならない語を補足語と謂ふ。

動詞の性

自動詞 (客語が要らない)
他動詞 (客語が要る)

補足語の要らないもの
補足語の要らないもの
補足語の要るもの

文例

(一) 雨 霽る。

(二) 風車 廻轉す。
紙鳶 電線に 懸る。

(三) 猫 雛と なる。
猫 鼠を 捕ふ。
獵夫 鹿を 射る。

大
風
(風車)

(一) (二) (三) (四)

大なる道に成る
此は將來に成る
よく物をすははる
此は肥料をやること
此は肥料をやること